

# Eureka XIII

六年制通信 No.33 令和8年1月23日(金)号

## 『莊子』からいくつか

もう終わったかと思ってがっかりしていたのですが、NHKが再度「明鏡止水～武のKAMIWAZA～」の放送を始めました。私、前回から楽しく観ています。毎回ものすごい達人たちが出ますし、俳優の岡田准一が熱く解説するところが好きでね。彼に武術の心得が十分にあるのがよくわかります。それで、この「明鏡止水」というタイトルなのですが、武術家が好んで用いる言葉なのですね、きっと。『大辞泉』によると…明鏡止水：曇りのない鏡と静かな水。なんのわだかまりもなく、澄みきって静かな心の状態をいう。使い方として「明鏡止水の心境」とあります。なるほど、雑念を排するのは武道の修業にとって重要なことです。もちろん勉強するときも大切です。ちなみに私はこの言葉を今から35年ほど前に、極めて短命に終わった内閣の、あれは宇野総理でしたかな、辞任会見で聞きました。今のお気持ちはと問われた総理が確か「明鏡止水の心境であります」と答えたことと記憶しています。シャレた表現を使うものだと思ったので記憶に残っています。実は、これは『莊子』にある言葉だということは知っていましたが、ずっと出典に当たったことがなかったのです。それで今回、いい機会だと思って探してみたので皆さんに紹介します。『論語』からの引用は何度もしてきましたが、『莊子』からは初めてですよ。 「明鏡止水」と有名なのをあと二つ紹介します。

「明鏡止水」は内篇の「徳充符」にありました。ただし、この言葉そのままには使われてなくて「明鏡」と「止水」が別々にありました。「明鏡」は「鑑明らかなるは即ち塵垢止まらざればなり(かがみあきらかなるはすなわちじんこうとどまらざればなり)」（鏡にくもりがないのは、塵がつかないからだ）、「止水」は「人は流水に鑑することなくして、止水に鑑す(ひとはりゅうすいにかんすることなくして、しすいにかんす)」（人は流れる水を鏡とせず、静止した水を鏡とするものだ）という箇所だと思います。二つ合わせて「明鏡止水」としたのは誰か知りませんが、いいセンスですね。

次に紹介するのは、おそらく最も人口に膾炙していると思われる。皆さんも知っているに違いないと思いますが「井の中の蛙大海を知らず」です。外篇の「秋水」にありました。「井蛙は以て海を語る可からざるは、虚に拘ればなり(せいあはもってうみをかたるべからざるは、きよにかかれればなり)」（井戸の中の蛙に海のことを話してもわからないのは、自分のいる狭い場所にこだわっているからである）と。出典に当たると面白いですね。実はこれに続いて「夏の虫に氷のことを話してもわからないのは、自分の生きている季節だけを時だとかたくなに考えているからである」とあるのです。これは知らなかったなあ。しかし、「夏の虫は氷を知らず」ではちょっとダサいか。

また、私の最も好きなのは「応帝王」にある「將ラズ迎ヘズ、應ジテ藏セズ」（おくらずむかえず、おうじてぞうせず）です。意味は「去るものは追わず、来るものはことさら迎えようともせず、相手に応じて接し、しかも心にとどめることをしない」ということです。つまり全てのものを去来に任せるということですね。いい言葉だと思いませんか。「藏セズ」は「藏メズ」で（おさめず）、あるいは「藏サズ」で（かくさず）と読む版があるようです。私は「藏セズ」派です。また、「迎ヘズ」は私が覚えたのは「逆ヘズ」でした。しかもこの「逆」は「辻」のように、しんのように点がもう一つある漢字なのですが変換できないので頭で補っておいってください。岩波文庫は「迎」ですが『新釈漢文大系』では私の覚えた漢字でした。

「將ラズ迎ヘズ、應ジテ藏セズ」は要するに物事にとらわれない心ということで、前に平常心でいることの大切さと難しさを書きましたが、これもまた同じですね。物事に動じない、後に引きずらないということですから。

ついでながらも一つ、『莊子』ではないのですが、何物にもとらわれない心を表す言葉を紹介しましょう。将棋の棋士で七度目の挑戦で名人位に就いた故米長邦雄永世棋聖が扇子にしたためた言葉で、「日月無心」です。出典は知りません。ただ、読みは「たちもりむしん」です。米長さんには「惜福」という扇子もありますが、これは出典が幸田露伴の『努力論』です。昔の人は字がお上手ですからいいですね。

以上、明鏡止水など、紹介いたしました。

## 今週のおすすめ

・下村敦史 『闇に香る嘘』（講談社文庫）

江戸川乱歩賞受賞作です。また下村さんの本ですが、面白いのだから仕方ないでしょ。選考委員の有栖川さんが「この作品は相対的Aではなく絶対的Aだ」と言ったとか。解説にもありましたが、こんな評価のされ方はなかなかないのだそうです。

「中国残留孤児」というのは、君たちは歴史の時間に習うのかな。ここで詳しく解説するには紙面が足りなさすぎますが、先の大戦後の悲しい出来事です。

母と自分は終戦前に日本に帰ってきたものの、兄とは大陸で生き別れになった。中国残留孤児になった兄は40年ぶりに帰国でき、岩手で母と暮らすようになった。自分は東京に住み、別居している娘と孫娘がいる。孫娘には腎臓移植が必要だが、自分や娘のは適合しない。兄に頼むしかないわけだが、兄は検査そのものを頑なに拒む。何かを隠しているようだ。本当に自分の兄なのだろうか。私たちは血がつながっているのだろうか。盲目の自分は兄の顔を見ていない。どうしても疑いが晴れない。そんな折、実家の岩手経由で送られてくる点字で書かれた意味不明の俳句が…。

謎が謎を呼ぶ。盲目であるがゆえの恐怖もよく描かれていると思います。伏線の回収もよくできています。細かいところをつつけばいくつか「？」がありますが、下村さんの受賞後の活躍を考えれば、目をつむっていいかと。

BGMは さだまさし&佐田玲子の あなたを愛したいいくつかの理由 でした…。